

天草地域の担い手確保・育成に向けた林業事業体への伴走支援

～新米・林業普及指導員の挑戦！～

熊本県 天草広域本部 農林水産部 林務課 技師 西村 富美佳

1 はじめに

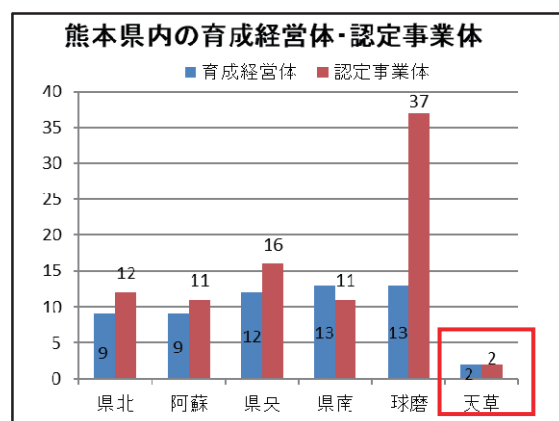
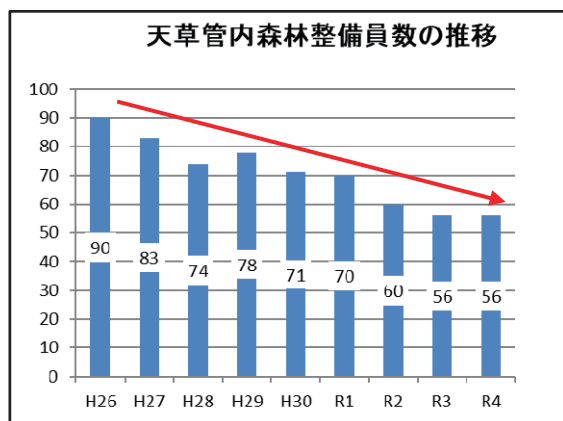
熊本県天草地域の林業従事者は、高齢化による定年退職や転職により年々減少しています。天草の土地柄もあり、地元の高校生は卒業後、天草地域外で就職することが多く、林業担い手対策は急務となっています。また、森林環境譲与税を財源とした森林整備や利用可能期となった人工林の間伐から主伐への移行が本格化されることから、天草地域の主軸となる林業事業体の育成や協力体制の構築が必要です。今回、新たな林業事業体が林業経営等に意欲をもち、相談に来られたことをきっかけに、林業普及指導員（担い手担当）1年目の目線でこれらの課題解決に向けて取り組みました。

2 取り組みの概要・経過

(1) 現状

天草管内の林業従事者数は高齢化や転職により、減少の一途となっています。また、県内の他地域と比べると地域の主軸となる林業事業体が少ない状況です。（R2 末時点で管内の認定事業体・熊本県版育成経営体は、2 事業体のみ）

このような中、地域の主軸候補となり得る事業体に対して、個別の働きかけや相談対応を実施し、様々なことに一緒に取り組むことになりました。



(2) これまでの取組の成果

① A 事業体に対する取り組み

伐採、再造林、製材、苗木生産など小規模ながら林業一連の流れを自社ですべて行う A 事業

体は、令和3年度に熊本県版育成経営体を選定されました。育成経営体選定後、生産性を向上させたいという相談を受け、「植穴名人（コンテナ苗植栽用パワーアシストドリル）」と「グラップル」の導入を支援しました。また、安全に長く林業を続けてほしいという思いから、技術研修への参加を提案した結果、研修に参加され、技術力を磨きつつ、他事業体との交流を後押しすることができました。

現在は、主伐後のセンダン植栽や下刈り等の森林整備に意欲的に取り組まれています。



植穴名人

(コンテナ苗植栽用パワーアシストドリル)



チェーンソーの技術研修を受講

②B事業体に対する取り組み

雑節用の薪生産を行うために広葉樹の伐採を行うB事業体は、従業員が働きやすい職場環境を目指し認定事業体になることを決意されました。そのため、認定事業体の認定に必要な計画書について、今後の会社の経営方針等を踏まえ、作成を支援しました。認定事業体認定後、現場作業の効率化・労務負担軽減のために「アシストスーツ」の導入に興味があると相談を受け、試着と試用による支援を実施しました。その結果、導入に意欲をもたれ「電動クサビ」や「ユニック車」を含め、導入に向けて準備中です。また、安全に林業を行う知識を身に着けたいという思いを受け、各種研修等を紹介した結果、従業員全員で緑の雇用研修を受講し、知識・技術の取得に励まれています。



アシストスーツ



電動特殊クサビ



安全作業の振り返りを実施

③地域の林業事業体全体に対する取組み

林業事業体から普及員へ、今後の林業経営の方針や取り組みたいこと等を気軽に相談してもらえる関係性を構築するために、普及員と事業体が直接顔を合わせる機会を増やしました。

また、林業事業体同士の連携体制や協力体制をつくるために、管内の育樹活動への参加を呼び掛け、一緒に活動することで、お互いの活動に興味を持たれるなど、情報交換を行うきっかけとなる場を作りました。



林業事業体現場パトロール実施



林業事業体合同で植栽活動実施

3 実行結果

今回の取組みにより天草地域の主軸となる事業体が増加しました。（2事業体→4事業体）

また、林業事業体と林業普及指導員の信頼関係構築に努めることで、林業事業体を持つ「やる気の芽」を見逃さない、きめ細やかな支援や情報提供を行うことができています。

さらに、林業事業体等が一同に集まり活動する機会を創出することで、林業事業体同士の横のつながりや、協力・連携体制構築のきっかけをつくることができました。

4 考 察

（1）個々の林業事業体に対して

今後、天草の林業従事者を増やすには、その受け皿として技術力や経営力のある安定した林業事業体への成長が必要であるため、不定期に現場訪問を行い意見交換や情報収集をする機会を増やすなど、林業事業体が普及員に気軽に相談できるような関係づくりを継続して行うことが必要だと考えました。

それにより、新規林業就業希望者が「天草で林業をしてみたい！」と思える魅力ある林業事業体になることを期待しています。

（2）林業事業体全体に対して

林業事業体各々に得意分野があり、それらを生かして相互に連携・協力しながら適材適所の施業を行っていくことが必要なため、定期的に集まる場の創出や意見交換会・研修会等を実施するなど、管内林業事業体等の横のつながりを強化する取り組みを行うことが必要だと考えました。

それにより、林業事業体等で天草地域の林業を支えていくための協力体制が構築され、天草の森林の循環利用（主伐・再造林・間伐・広葉樹整備 等）が円滑に進むことを期待しています。

5 まとめ

これからも地域の林業事業体の皆様と、できるだけ同じ目線に立ち、隣で一緒に頑張ることができる関係性を築きながら、様々なことに前向きに取り組んでいきたいと思います。

しんりん ちいき 森林と地域の人々をつなぎ、こどもたちの“心”を ^{こころ}育 ^{はぐく}む ^{もくいく}木育の ^{とりくみ}取組。

屋久島森林管理署 次 長 倉本 雅則
ウッドショップ木心里 代表 鹿島 裕司
子育て支援 tetote 代表 日高 ゆかり

1. はじめに

屋久島は陸域の9割以上が国有林です。太古の昔から森と人が密接に関り共存してきた歴史があります。

先人から受け継いできたこの美しい森林を守り未来のこどもたちに受け継いでもらいたいと考えていますが、国有林を含む森林が近くにあるにも関わらず、子どものころから森林・林業に親しんでいない現状があります。

それを打開するために「木育インストラクター」の資格を有し、国有林をフィールドとして島内で活躍する「ウッドショップ木心里」と「子育て支援 tetote」と「国有林」が中心となり木育活動に取り組んでいます。

林業・木製品のPRや川上から川下へ森林と地域の人々をつなぎ、笑顔あふれる期のある暮らしを目指す取組を推進する観点から発表することとしました。

2. 取り組みの概要・経過

(1) 川上から川下へ、森林と地域の人々をつなぐ取組

ア・守る森と育む森を学ぶ森林の体験学習

屋久島に住むこども達に、保全する森と人の手で植え育てる森があること知ってもらうために、自然休養林に位置付けられているヤクスギランドや国有林の木材生産現場において、多様な植生の分布を学ぶ体験学習、木の伐採・製材所の見学、植栽・木工体験など川上から川下まで地域の木材流通について森林や林産業「木の専門家」から学び体験を行いました。



森林・林業の学習体験
(自然休養林ヤクスギランド)



木材生産現場
(鍋山国有林)



製材所見学
(有限会社有水製材所)

イ・未来の林業を支える応援団づくり

乳幼児期に五感体験をすることがその後の人格形成に大きく影響してくると言われています。

森を歩き、木々にふれ香りや手触りの心地良さを知ったこどもたちはどのような大人に成長していくのでしょうか？さまざまな立場で林業を支えてくれる心強い応援団づくりに取り組みました。

屋久島の7種類の樹木でカスタネットを制作し、地元の高校生が制作した地杉の木琴とコラボして、それを活用し森の演奏会を行いました。



地杉で木琴・カスタネットを制作



7種の樹木で制作したカスタネット



森の演奏会

ウ・副産物、支障木を活用した商品開発

屋久杉や地杉のほかにも様々な木の魅力を知ってもらいたいとタブやクスノキなど屋久島の8種類の木を使った積み木の製作では、背板や枝材などの部位も取り入れ、積み重ねると1本の木になる「きこりさんのトントン積み木」は、現在鹿児島県の本育教材「かごもく」として県内の本育インストラクターや教育・保育現場で利用されています。

(2) 森林環境税を活用した取組

屋久島町では、令和3年度から鹿児島県内では初となる、「誕生児への木材製品贈呈事業」が始まり、地元の木工職人が地元産材で作った製品が新生児へ贈呈されています。

また、令和4年度から本育インストラクターによる本育教材の開発や普及活動も開始され、地域材の魅力を知らう活動が積極的に行われており、森林管理署、青年林業士、製材、木工、保育、子育て支援関係者等と連携した取組を行いました。



新生児への木製品贈呈事業



本育の普及活動



森林・林業の体験学習

3. 実行結果

国有林をフィールドとして川上から川下へ木材流通や林業の歴史・生態系について体験し学ぶことを通して地域の方の森林・林業への関心が芽生えたと考えています。

森林・林業の体験学習に参加した園のアンケート調査を実施しました。

- ① 令和4年度 森の活動に参加してみたいか？満足度を教えて下さいの質問には、25%が良い、大満足 50%が満足という回答でした。
- ② こども達が満足したプログラムはどれですか？の質問にはヤクスギランド散策、製材所が75%と一番満足度が高いプログラムとなりました。

③ 森の活動で子どもたちが屋久島の木々や自然、歴史に興味や関心を持ったと思いますか？の間には、とても思う、思うが50%ずつで100%思うということになりました。

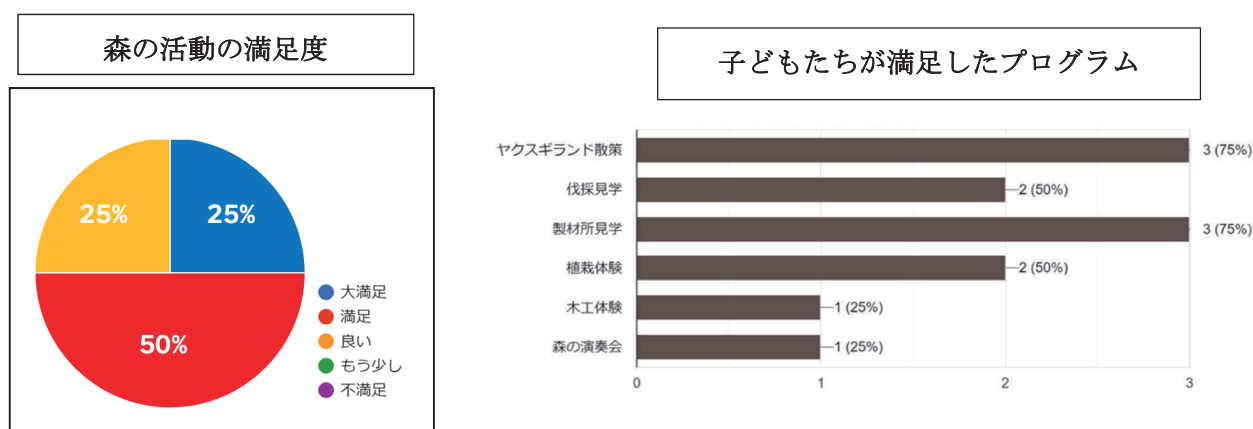
今後も継続して森の活動や木育活動に取り組みたいですか？の質問には100%取り組みたいという回答を得ました。

活動に参加した意見として、①シリーズ化がとてもよかった、②屋久島の木々(自然)が私達の生活を守ってくれている感じがした、③木も全く同じものがないことが楽しいことに気づいた。

という意見から、令和5年度も継続して取り組んでおり、森の活動や副産物の活用として全園児がふれることができる積み木の製作を行う予定です。

応援団は島内のみではなく、木育を通して知り合いになった北海道森林管理局の平田美紗子さんがこの活動に共感して下さり、応援のエンブレムを作成して頂きました。

遠く離れていても応援団がいてくれることがとても励みとなりました。



4. 考 察

今回は、森林・林業に携わる「木の専門家」や、行政、保育、子育て支援関係者等との連携を図ることができました。

また、植栽体験では「大きく育ってほしい。」と、子ども達が自然に言葉にするほど森林・林業への関心の高さを感じることができたことから、今後も木育を通じて地域材との触れ合いを計画して行きたいと考えています。

あの山のあの森の木々を多くの人に届け、地域材と地域の人々をつなぐぐみの積み木 KUMINOを通してたくさんの笑顔と木のぬくもりを届けたいと思っています。

最後に2050年までに「カーボンニュートラル」脱炭素に向けた地球温暖化への対策が求められていることから、製材所見学と木材生産現場での子供達と保育士の先生の感想で「木は手触りが気持ちよくて、とっても良い臭いがするね。」の嬉しい言葉を胸に、木材の利用と普及について木育インストラクターと国有林が連携して、多くの人の理解を深める木育活動を今後も行っていきたいと考えています。

「持続可能な森林づくりを目指して」

～林業関係者の連携による椎葉村での取組み～

宮崎県 東臼杵農林振興局 椎葉駐在所 技師 高庄 悠悟

1 はじめに

椎葉村は、村内面積の 94%にあたる 50,457ha を森林が占め、第一次産業の生産額における林業の割合が 77%（令和元年度末）を占めるなど、林業が重要な産業となっています。一方で、再造林率は高い水準を維持しているものの、今後、担い手不足等により、持続的な森林づくりに支障をきたすことが懸念されています。

今回、村内の担い手の現状について調査を行い、その結果から得られた課題及びその解決に向けた取組について考察を行いました。

2 現状と課題

(1) 森林組合への聞き取り調査

耳川広域森林組合椎葉支所の資料によると、森林組合の造林班（以下、「造林班」という。）又は、森林所有者自ら（以下、「個人施業」という。）が森林施業（植栽、下刈り、除・間伐）を行った面積は、平成 29 年度の 933 ha から令和 3 年度の 803 ha と 130 ha 減少していました。

そのうち、造林班が施業を行った面積は、平成 29 年度で 486 ha（同年度の 52%）でしたが、令和 3 年度では 517 ha（同年度の 64%）に増加していました。

一方で、造林班の人数は平成 29 年度には 48 人いましたが、令和 3 年度では 31 人に減少しており、造林班の一人当たり施業面積は 10.1 ha/人から 16.7 ha/人へ増加していることが分かりました。

(2) 森林所有者への意向調査

林業座談会（詳細は後述）においてアンケート調査を実施し、参加者 113 人のうち 105 人から回答を得ました。「過去 5 年以内に所有する森林で森林施業（他者への委託を含む）を行った」と回答した方は全体の 65%（68 人）で、そのうち 78%（53 人）が個人施業を行っていました。

また、個人施業を行った方 53 人のうち、「近年中に他者に任せたい」と回答した方が 21%（11 人）

「5 年程度は自分で行い、その後は任せたい」と回答した方が 42%（22 人）おり、あわせると 63%（33 人）が 5 年以内には他者に任せたいとの意向があることが判明しました。（図－1）

なお、他者に施業を任せたいと考えている方 39 人のうち、約半数の 18 人が委託先として森林組合を予定していることが分かりました。（図－2）

(3) 造林班との意見交換

造林班の作業における課題を把握するとともに、担い手確保につながる取組について

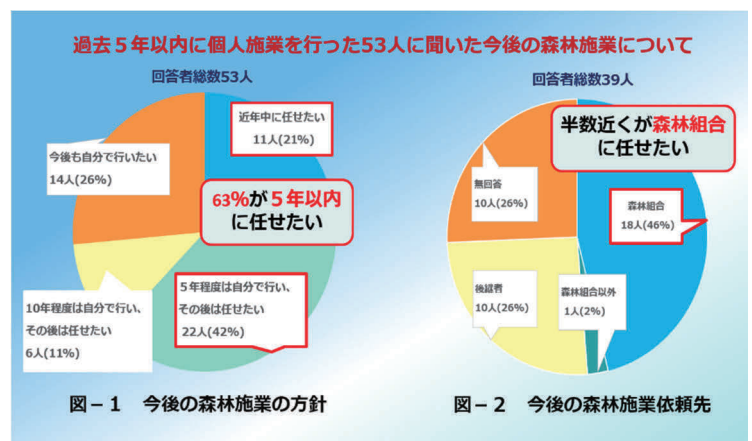


表 1 森林所有者の今後の意向状況

手がかりを得るため、令和4年8月に造林班の作業員7人と意見交換を行いました。

作業班員からは、「特に、植栽や下刈り作業が体力的にきつい」「ドローンによる苗木運搬に取り組みたい」等の意見が出され、作業班員もスマート林業等の新たな手法に期待していることが把握できました。

このため、新規担い手の確保・育成に加え、森林整備作業の省力化・軽労化が喫緊の課題であると再認識しました。

3 課題解決への取組

(1) 早生樹等の植栽実証試験

令和4年3月に下刈りの省力化が期待できる早生樹等の植栽実証試験地を村内2箇所に設置し、林研グループ、役場、森林組合と連携して下刈り・防護柵補修等の維持管理と毎月の樹高計測を行いました。この取組により、早生樹を活用した新たな森林施業方法について関係者の理解を深めることができました。



写真1 林研グループによる下刈り状況

(2) 林業座談会での情報提供及び意見交換

令和4年7月下旬から8月上旬にかけて村内9地区で開催された林業座談会(森林組合主催)に出席し、再造林の必要性、スマート林業推進の必要性、みやざき林業大学の概要等について情報提供を行いました。

また、林業関係者との意見交換会では、森林組合作業班員の確保・育成が喫緊の課題であるとの意見が多数出されたほか、エリートツリー苗の入手や大型ドローンに関する研修会の開催等を要望する声もあったことから、役場や森林組合等と連携しスマート林業推進協議会を設立することとしました。

(3) 大型ドローン実証研修会の開催

令和5年2月に地元の林業関係者を対象にした大型ドローンによる苗木・防護柵等資材運搬の実証研修会を森林組合主催で開催しました。

地元関係者の方が大型ドローンを目にするのはほとんどの方が初めてであり、スマート林業に対する関心の高さが伺えました。

また、運搬作業の省力化に有効であるとの意見が多く寄せられました。



写真2 大型ドローン実証研修会の状況

4 考 察

実証試験地の早生樹については、その多くが概ね順調に生育しており、定期的に成長を記録し、データの蓄積を行っています。材の活用方法等については研究段階のものが多いため、引き続き情報収集に努め、関係者と共有していく必要があります。

また、大型ドローンを活用した資材等の運搬については、運用にコストがかかるという課題があるため、ドローンを効率的かつ低コストに運用するための活用方法について、今後の検証が必要になると考えております。

5 ま と め

今後は、早生樹等植栽実証試験等の取組を継続・検証していくとともに、資材運搬用ドローンの有効性の検証や現地研修会の開催等を関係者と連携して行うことで、担い手不足問題の解消に取り組み、持続可能な森林づくりを実現したいと考えています。